



NPO 法人

全日本語りネットワーク

ニュース

〒185-0021 東京都国分寺市南町 2-18-3 国分寺マンション B-03A

(Fax) 0237-67-7001 (振替) 00130 - 2 - 114808

(E-mail) welcome@japankatarinet.jp

(HP) <http://japankatarinet.jp/>

2023. 10. 15 発行

「語り継ぐ」ということ

古屋和子（東京都杉並区）

東日本大震災からもう 12 年。魂消える思いを味わったのが、いつのまにか「少し非日常の記憶」の一つに収まっていくようです。

ストーリーテラーの役割は「語り継ぐ」こと。歴史、宗教、文学、神話伝説等、あらゆる分野にわたって、何を、どう、語り継いでいくのかを考えます。

大震災から 12 年経った今、過去の悲惨さを語り継ぐことは、もういい。未来に目を向けなくては、という意見も、未来に備えて語り継がねばならない、という意見もあります。どちらが正しいという訳ではなく、何をどう語るかは、語り手の立場、思考、資質などによるのだと思います。

先日、伊豆伊東市で聞いた話です。伊東は 1703 年元禄大地震の折 30 メートルの津波が来た。1854 年には安政の大津波があった。二度の経験からの申し送りが「地震が来たら、とにかく、各自、高いところに逃げろ」。このおかげで、関東大震災の折、宇佐美地区では一人の死亡者も出さなかった。安政の折には 100 人ほどが死亡したのに、です。川奈地区のお寺の階段には、下から、安政、大正、元禄と、地震時の津波の高さに石碑が立っています。ここに語り継がれているのは、生きる為の事実、です。

災害の場合、被災当事者と、非当事者では、語り継げるものは当然違ってくるし、国策事業による甚大な災害と、自然災害の場合も、語る人の立ち位置が変わるかもしれない。

でも変わらないものが一つ。その大災害後の日常の中で起こる様々な出来事。非常時だから耐える、では済まない様々なことを丁寧に拾っていくこともまた、語り継ぐ大事なことだと思うのです。

人間の素晴らしさや醜さ、援助する側の善意のつもりでの迷惑や思い上がった善意、助成金に対する嫉妬と偏見、あたりまえの日常を取り戻すことの困難など、ボランティアで聞く様々な内輪の話は、表に出てくるのが少ないけれど、これもまた、語り継がねばならない大事な話だと思います。援助される側が何を感じ、求めているかを、援助する側は、ちゃんと知る必要があると思うのです。必要なことと、不要なこと。それを公文書での事実の羅列ではなく、噛み砕かれた物語として語り、広げていくこと。当事者が語れば怒りにしかならないであろうことや恥ずかしくて口に出さないことどもは、非当事者が語る方が距離がとれるかもしれません。

例えば、近年やっと生理用品の援助の必要性が語られ出したけれど、老人は男女を問わず、被災時に必要になるのは尿パッドやオシメ、緊急用のトイレの類。介護を経験した者にはすぐわかることですが、下の失敗は、いたく自尊心を傷つけ、気力を失わせるものです。あまりに卑近で、ちょっと言い出しにくいけれど、確実にないと困るものを知ってもらうこと。こうした、考えようによっては悲惨なことどもを、ユーモアも持ち、未来を拓く方向で、イキイキと語り伝えることができれば、と思います。

最後に、同郷の被災当事者と非当事者の共同作業として、岩手出身の俳人 照井翠の、震災時を詠んだ句とその後 10 年の越し方を書いたエッセイを、岩手出身の語り手 野口田鶴子が語った「釜石の風」という CD が出来ました。(最終ページ参照) 語り継ごうとする二人の思いの深くこもった、言霊と音霊の響きあう一編。ぜひ聴いてみてください。